

的な宗教商品を宗教交流という国際貿易によって相補的關係に基づいて交換しているのである。日本における韓国系キリスト教の受容・拡大は、日本には無い韓国のキリスト教が有する特性がそこに存在している。また、韓国における日系新宗教の受容・拡大は、韓国には無い日本の新宗教が有する特性が存在しているのである。したがって、今日の日韓の宗教文化交流を宗教市場論によって両国の相補的關係を明らかにすることで、日韓相互における宗教の拡散状況を説明することができると思われる。

日本産ブラジル系プロテスタント教会信者の

ブラジルへの再適応

山田 政 信

移民と宗教をテーマとする研究において、東海地方の諸都市を中心に集住するブラジル人デカセギ者の日常生活における宗教活動の具体相とその意味に关する調査研究は未だ十分とは言えないが、その一方で帰国した元デカセギ信者らのブラジルへの再適応を宗教的側面から明らかにすることは重要なテーマである。

筆者のこれまでの調査によれば、ブラジル人自身が設立したプロテスタント教会（日本産ブラジル系プロテスタント教会）はその設立の経緯から次の四つに分類できる。①日本産ブラジル系教会・デカセギが独自に日本で誕生させた教会。②海外宣

教型ブラジル系教会・ブラジルの教団が海外宣教の一環として開いた教会。③ブラジル系提携教会・教会を設立する際にデカセギがブラジルに本部を置く教団と提携を結び、その下部教会として誕生させた教会。④ニッケイ教会・移植されたブラジルの日系エスニック・チャーチ。本稿は、④のタイプのホーリネス教会を事例に、デカセギ信者の日本における活動と帰国した人々のブラジルでの宗教活動への再適応を信者ネットワークに着目しながら考察する。

ホーリネス教会は中田重治らを中心に一九一七年に日本で設立された。ブラジルには信者が一九二五年に出稼ぎ移民として渡伯し、同年宣教目的で渡った物部越夫を中心として日本人社会に伝えられた。日本でホーリネス分裂事件が起こった翌年（一九三四年）、ブラジルの信者の群れはブラジル・ホーリネス教会として独立した。そのため、デカセギ信者は日本の教団とは独自の活動を展開している。ブラジルでは日系人社会に定着したエスニック・チャーチとして知られ、日系人の集住する南東部地域を中心に約四十か所の教会・伝道所を開き、信者数は約四千人、ニッケイ教会では最大規模の教団である。近年では南東部以外の諸教会で非日系人信者が増えている。元来、ペンテコステ派の流れを汲むものの、集会の雰囲気は静かで大人しく伝統的なスタイルが踏襲されている。他の日本産ブラジル系プロテスタント教会の多くはペンテコステ派だが、ホーリネス教会はそれとは異なり極めて保守的かつ日本的な（ニッケイ）アイデンティティが共有されている。

日本では一九九五年にデカセギによって組織化が開始され

た。活動初期から二〇〇九年までブラジルの教団から六名の牧師が経済的支援を受けて順次派遣されていることから、海外宣教型ブラジル系教会の特徴も持っているといえる。しかし、日本の教会活動でも非日系人信者が少ないことが特徴で、ブラジルで構築されていた信者ネットワークが彼らの日本での活動基盤を成していることがわかる。二〇一一年現在、八か所の教会と伝道所を開き、信者数は百五十人程度。そのうち約半数が日本で入信している。活動のピークは一九九八年頃であり、現在は停滞しつつあるとみられる。

筆者の調査(二〇一一年三月)では、リベルターデ教会では信者七三名のうち大卒・大学院卒が五七名と学歴が極めて高いという特徴がある。そのうちデカセギ経験者は九名で、以前からの信者としてネットワークを維持しつつ帰国後も教会活動に順応している。一方、日本で入信した信者は、帰国後のネットワークの構築に困難を感じている場合が多い。日本ではデカセギの間で階層意識が平準化され、個々のバックグラウンドは問わずに「家族(同族)意識」が高まるが、帰国後、高学歴・専門職の多い信者層を前にして階層差を感じ、元信者が教会活動から離れる場合が散見される。

本研究は、二〇一〇年度 天理大学 学術・研究・教育活動助成(研究課題名「宗教実践の構成と組織化…在日ブラジル人と帰国ブラジル人の事例」)による研究成果の一部である。

ハーレムの黒人教会を考える

芦名裕子

ニューヨークのユニオン神学校はハーレムに隣接しており、芦名裕子は一九八七年の訪問以来、パウル・テイリツヒ(一八八六一一九六五)がハーレムの黒人教会をどう考えていたか疑問に思っていたが、二〇一一年の再訪の際、実際にハーレムの黒人教会を巡り、テイリツヒやボンヘッファーの黒人教会との関わりを考える。再訪までの二十年で、ニューヨークは安全な街となり、映画の影響でゴスペルが世界的に認知された。

ハーレムの教会は、公的な場所で正装して行く。男性はタキシード、女性は派手な帽子に豪華なスーツで礼拝に出席する。早くから正装での礼拝出席を説かれていた牧師の植村正久氏(二八五八一一九二五)について述べ、次に、黒人と結婚したラファディオ・ハーン(一八五〇―一九〇四)の状況を論じる。テイリツヒは、ニューヨーク亡命の一九三三年に、ドイツ語新聞社主の案内する旅行グループと一緒にハーレムへ行つたという記録だけで、黒人教会との関係は不明である。彼は、一九三三年から一九五五年まで、ユニオン神学校の教員だったが、客員講師からの出発で、安泰したものではなく、英語から学ばねばならなかった。ハーンが黒人との結婚で職も失ったように、安易な黒人教会への発言は職を脅かすものだったかもしれない。

現在では、黒人学生が多くいるユニオン神学校だが、テイリ